

兵庫県こころのケアセンター 平成21年度実施分に係る
外部評価委員会 業績評価（個別事業評価）

| 評価対象事業 | 評価 | 所 見 |
|------------------------|----|---|
| 研修事業 | S | <ul style="list-style-type: none"> ・ 広範な範囲の専門職に向け充実した研修が提供されており、受講ニーズの変化に対応して、適切な講師を用い、多くの研修を行い、受講者を集めていることは評価できる。 ・ 定員（600人）を超える受講者数（660人）、平均評価が4.2と極めて高く、県外受講者が約3割となっており、教育研修施設として兵庫県のみならず、本センターの有用性が認められていることがわかる。 ・ ただし、専門研修がより深まれば、少人数での講義を必要とする可能性があり、今後は参加人数だけでなく、提供される情報の質についても評価していくことも必要ではないか。また、本センタースタッフの研修への関わりは、多忙であるため、過重負担とならなような方策が必要と考える。 |
| 情報の収集 発信・普及 啓発事業 | A | <ul style="list-style-type: none"> ・ シンポジウムは、本センターを中心とするこころのケア実践に基づく内容で、9割の参加者より有意義であったとされ、県外からの参加者が1/7を占めており、評価できる。 ・ 日本トラウマティック・ストレス学会との共催で開かれた市民公開講座は、専門家のみならず、一般市民にも開放されており、アジア諸国の専門家を集める企画も、本センターならではのオリジナリティがあって良かった。 ・ ホームページは、研修申し込みや受診などを知らせる目的には良いが、トラウマについての情報や研究成果を紹介するには、探しやすくするなど工夫の余地があると思われる。 |
| 連携・交流 事業 | S | <ul style="list-style-type: none"> ・ JICAとの連携による四川大地震といった国際的な支援、県内の台風9号豪雨災害と、社会貢献を十二分に達成している。さらに、新たに精神保健福祉センターなど関係機関との連携で、自殺対策への取り組みが始まったことは良いことで、今後さらに重要性が増すものと思われる。 ・ しかし、職員の多忙に対する手当と日常臨床業務との棲み分けがなされているか。今後、緊急支援が増えていくと、緊急支援は独立した業務として、日常業務を担当しない者が対応するための予算も必要かもしれない。 ・ また、災害や事件のグローバル化は進んでおり、何処でどのように支援するかという基準作りや、コラボレーション又はコンサルテーションのモデルを作っておくことは、今後の支援をより有効に展開できるのではないかと思う。 ・ 各種会議の開催による情報の交換や共有は、研究や研修に良い影響を与えていると考えられ、評価できる。 |
| 相談事業 | A | <ul style="list-style-type: none"> ・ 土曜開館により機動的に取り組んでいる姿勢を評価する。また、相談件数は、前年度に比べ増加しており、社会的な要請に答えている。 ・ しかし、トラウマ・PTSD相談より一般精神保健相談件数が増加し、災害・事故によるトラウマ・PTSDの専門機関としての意味合いが薄れてきているとも考えられる。一般の精神保健相談ケースが入ってきて、しかもリピーターが増えてくると、センターの相談部門と他の関係機関との連携を強化し、相談ケースをある程度整理することも必要と考える。 ・ あるいは、相談対象でないケースには、「一定回以上の相談は受けない」などのルールを決めてもよいのではないかと思われる。 ・ 一方、トラウマ・PTSD相談について、相談室は、「つなぐ」機能だけでなく、「継続した相談機関」とした役割を重視してもいいのかもしれない。 |

| | | |
|----------------------------------|----------|--|
| <p>附属診療所の運営</p> | <p>A</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・トラウマ・PTSDの治療機関として、「どんな重度のストレス障害にも、本センターで回復できる」とのメッセージを社会に送っている点で、非常に高く評価できる。 ・しかし、PE療法（長時間曝露療法）やEMDR（眼球運動による脱感作と再処理）などのトラウマ療法は、1回の治療時間が長く、また、JR福知山線事故被害者のように少しずつ回復はしているものの、長期の継続治療を要する人が多く、本センターのスタッフは、どのように治療者として研究者として二つの役割をこなしていくかが問われるところであり、診療所の位置づけを再考・確認する時期にきているのではないかと思われる。 ・また、専門性が周囲に認識されるにしたがって、困難事例が増加し、新規ケースの受け入れができなくなることも予想され、診療所での人員体制を強化する必要があるのではないかと思われる。 |
| <p>ヒューマンケアアカレッジ事業（音楽療法士養成講座）</p> | <p>A</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・県による独自の音楽療法士の認定であり、全国でも先駆的な試みである。 ・しかしながら、本センターで音楽療法士の養成と認定及び音楽療法の新規導入施設の開拓を行っているが、基礎講座は多くの応募者があったとしても、専門講座に進む応募者が少なく、高い専門性を担保できる音楽療法士の養成に役立っているのか。今後、音楽療法士たちが、実践の場でどのように役立っているのか、問題はどこにあるのかなどを調査し、プログラムのあり方を検討する方向に協力してはどうかと考える。 ・このことが、音楽療法によって県民福祉の向上にどのように貢献するのかを把握できることになるとと思われる。 |
| <p>ヒューマンケアアカレッジ事業（実践普及講座）</p> | <p>A</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ヒューマンケア実践講座は、「ヒューマンケア」理念を広く県民に浸透させる地道な取り組みであるが、受講者数もすべての講座で定員を超えており、アンケートによる講座の満足度も高く、評価することができる。今後は、高い満足度を維持しつつも、修了証書を授与される受講者の一層の増加を望みたい。 ・ただし、「ヒューマンケア」理念に基づく、保健・医療・福祉分野における新たな専門的人材養成のための講座とあるが、この講座の受講者がそれらの分野で、どのような貢献ができるかが明確でないように思われる。 |
| <p>センター業務運営の効率化</p> | <p>A</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・患者数は目標を下回るものの、ほぼ昨年と同程度の受診者を確保し、収支においても余剰金を認めることは評価できる。また、必要な予算と比較して、地域社会やトラウマを体験した被害者・被災者に大きく貢献しており、トラウマに関する治療、カウンセリング等が保険医療化されない限りは、これ以上の診療所収入を上げるのは難しいなかで良く努力している。 ・ただし、宿泊室の位置づけと運営について、今後は必要性を含めた検討が必要と思われる。 |

(基準)

S：年度計画を大きく上回り、中期計画を十分達し得る優れた業績を上げている。

A：年度計画どおり、中期計画を十分達し得る可能性が高い。

B：年度計画どおりといえない面もあるが、工夫若しくは努力によって中期計画を達成し得る。

F：年度計画を大きく下回っている。又は中期計画を達成し得ない可能性がある。